

道徳性に関する一考察

足利市立葉鹿小学校 川崎 廣三

1 長くドイツ人に親しまれてきた漫画の中で悪がきコンビが突きつけたものは

この小さな考察を書こうとしたのには、大きく偶然（私は奇跡と呼びたい。）が関わっている。これから引用する『ドイツ町から町へ』の中で出会った漫画のモチーフは、ずっと以前から私が感じ、考えてきたもので、いわば旧知の間柄だった。そして、同じ日の数十分後に手にした『新約思想の構造』の中で私の心に焼き付いた文章は、同じ一冊の本の中で隣り合っていて何の不思議もないものであった。こんなことは、本に親しみだしてからほとんど初めてとっていい。このような邂逅に少なからず興奮したが、それをだれに伝えるということもなく、何度も読み返し、心の中で反芻した。

一人よがりの前置きはこれくらいにして、さっそく紹介することにする。

ドイツの家庭には、きっと1冊はある。祖父にはじまり、三代にわたって読みつがれてきたようなケースもあって、手ずれで表紙が光っている。背がほつれたのを、丹念に補修してあったりする。新しい版がいろいろ出ているので、古いほうは宝物のようにしまっているかもしれない。なにしろ百三十年以上も前に出た漫画なのだ。

作者はヴィルヘルム・ブッシュとって、画家を志し、デュッセルドルフやミュンヘン、またベルギーまで出かけて修業をしたが、ちっとも芽が出ない。生まれ故郷のハノーファーに近い小さな町にもどってきた。

そのうち雑誌から注文を受け、カットやイラストを描くようになった。詩も上手なので絵物語にした。そんなふうにして名作『マックスとモーリッツ』が生まれた。

マックスとモーリッツは村の悪がきで、とんでもないいたずらをする。教師のレンベルさんは、教会のオルガンを弾くのが大好きだ。そのあとパイプをくゆらせながら瞑想する。マックスとモーリッツが留守中に忍びこんで、パイプに火薬をつめておいた。

やがてレンベル先生がもどってくる。パイプに火をつけ思索にふけた。

「この世に満ち足りていることこそ、この上ないよろこびというもの——」

ズドン！ パイプが炸裂して部屋はめちゃめちゃ、先生は大やけど。

時とともに傷は癒えたが
パイプは元にもどらない
これが第四のいたずらだ
お次は第五が引きつづく

カラーの絵とともに、きちんと韻を踏んだ詩の形をとって、つぎつぎと、いたずらの顛末が語られていく。

マックスとモーリッツは、パン屋の窯から焼きたてのパンをそっくり失敬した。ボルテおぼさんのニワトリを、のこらず紐で宙づりにした。仕立て屋のベック氏は、もんどり打って川に落ちた。木橋がノコギリで切ってあったからだ。だれがやらかしたしわざか、いうまでもない。

マックスとモーリッツのいたずらは、とびきり残酷で、容赦がない。とどのつまり二人は、これまたとびきり残酷な仕方で、この世からあとかたもなく消え失せる。これが名作となり、三代にわたり読みつがれてきたのは、どうやらいたずらの引きおこすおかしさのせいではなさそうだ。

レンペルさん、ボルテおぼさん、ベック氏は、いずれも村の好人物であって、「この世に満ち足りている」人々である。その人々がいたずらをされて、ふらつき、よろけ、頭から落下し、お尻をつき上げてすっころぶ。好人物性のもとにうぬぼれ、自己満足にひたり、温和に固定していた日常世界が、「ズドン」の一発でふっとんだ。

ハノーファーの小さな城が、ヴィルヘルム・ブッシュ博物館になっている。ゆっくり一巡すると、ユーモラスな漫画家の秘めていた、もう一つべつの顔が見えてくる。

（『ドイツ町から町へ』）

私の驚きを素直に伝えたいので、さっそく二つ目の文章を引用しよう。だれもがこの2つの文章の結びつきに何の違和感も感じないと思うのだが、いかがだろうか。

さて、自我主義にもさまざまな形態があるが、当人がそれと気づき難い形の一つに道徳的・宗教的自我主義がある。たとえば、道徳は他人のため、社会のためにあるのだが当人は結局は自分の道徳性に関心を持ち、自分の道徳的完成を求めて道徳熱心になっている、という形である。全くの義務感からそうなっていることがあり、完成した自分を眺めて自己満足にふけりたいという動機が加わっている場合もある。いずれにせよ、他者また社会は、つきつめれば、自分の道徳的行為のため — あるいは自分の道徳性を発揮するため — に必要な機会また条件に過ぎなくなる。極言すれば、当人は他者には関心がないのである。宗教の場合も同様である。宗教の教義や行は、その根本にある宗教的生の表現であり、その生は実際に了解されていなければならないのである。しかし、教義を信奉し、宗教的行為や行に励む動機が、教団での成功や名譽名声のためではなくても、結局は自分の宗教性の高度の完成のためで、当人の関心は宗教的真実ではなく、自分自身の安全・安心や完成にある、という形がある。この場合、当人の道徳ないし宗教の営みはただの「人為」になっているのに、当人も周りの人もそれに気づかないことがありうるのだが、この「人為」の兆候は、常に自分を眺め、人と比較して、絶望したり誇ったりしている、ということである。

（『新約思想の構造』）

2 カントがたどりついた「定言命法」

このことに関連して想起されるのは、カントが道徳性の原理としての「仮言命法」（「もし～ならば、～すべし」）を否定したことである。すなわち、「前件である条件句がなくなれば、後件である命法の内容も無意味に」（『カント入門』）なり、「このような命法は万人にあてはまらない」。そのため「カントの用語で言えば普遍妥当性ををもたず、法則としての資格はない」（*ibid.*）ということである。

また、「仮言命法にあつては、後件の命令そのものより前件の条件が主眼であつて、またそれが行為の動機になっているということである。『もし人に信用されたければ、嘘をつくなかれ』という命法においては、他人に嘘をつかないことが最終目的なのではなく、自分が信用されたいということが最終目的であり、かつそれが嘘をつかないという行為を促す隠れた動機となっている。これは単なる自愛の原理、わかりやすく言えば保身の原理であつて、そのかぎりにおいておよそ道徳性の原理ではありえない。この原理は、結局は自分（だけ）の幸福を主眼とすることから、『幸福の原理』とも呼ばれる。『自分だけの』という意味で今日のことばで言えば『エゴイズムの原理』（*ibid.*）というわけである。

それは、洋の東西を問わず広く通用していた黄金律（「おのれの欲せざるところ、他人に施すなかれ。」あるいは「おのれの欲するように、他人にも施せ。」（*ibid.*））にもあてはまるという。なぜならば「この黄金律を正確に定式化すると、『もし自分がなにかを欲しないなら、それを他人にも為すべきでない』、という定式」（仮言命法）「に変換できる」からであるというのだ。カントは「『他人に親切をつくさないですむものなら、他人が自分に親切でなくても結構である、という考えを喜んで承認する人が大勢いる』、ということをおあげている」（*ibid.*）

そこでカントは「定言命法」を道徳性の原理とする。定言命法とは、「仮言命法に見られたような条件句をとまなわずに、端的に『嘘をつくべきでない』、と命じる命法である」。

（*ibid.*）しかし、意識はしっかりとしているものの、余命いくばくもない人に対して、身を切るような真実を「嘘をつくべきでない」という定言命法にしたがって言うべきなのだろうか。少なくともそのような状況に立たされたほとんどの人が、割り切れない思いに身も心も苛まれることになるのではないだろうか。

3 なぜ私たちは道徳を必要とするのか

定言命法がもたらす疑問。これに答えるには、そもそもなぜ私たち（の社会）は道徳を必要とし、道徳性を求められるのか、そこに立ち戻って考える必要があるように思う。岸田秀氏が一貫して主張してきたこと、すなわち、人間に自我が生じたのは本能をなくしたせいだということに八木氏も同意している。道徳も含めて人類が築き上げた文明は、失った本能の補償の産物という見方もできるわけである。八木誠一氏は次のように書いている。

（……）理性的自我が主体であるとき、自我は身体をも対象化して制御しようとするから、自我と身体が分裂して、身体が肉体に変貌するのである。肉体は理性的自我を生か

す装置、ないし自我の道具と了解される。しかし、その分だけ肉体に化した身体は、病
気や死や「肉の」欲望で自我に反逆するようになる。他方、自我は身体から遊離した虚
構の実体となる。すると自我は、自己中心的に自我を定立することによって自我の虚無
性と肉体性を克服しようと努めるのだが、それだけ深く幻想的な自我主義に陥り、自我
に反する力の虜となってゆくのである。自我とは元来それ自身だけでは普遍的内容を欠
いているから、自分自身のあり方を選択するについて、自我中心主義とか、社会的通念
とか道徳的理念とかを必要とするのである。(ibid.)

4 困難な生を生きる「自由な創造的行為」の主体とは何者か

このようにして、その無根拠性を補償する形で析出された自我中心主義や社会的通念、道
徳的理念は、もとより私たちの生の絶対的な拠り所とはなりえない。もう少し八木誠一氏の
ことばに耳を傾けよう。

私が出発点で求めていたような「人間いかに生きべきかを導くマニュアル」は二重の
意味で不可能だった。第1に人生の諸場面はあまりにも複雑かつ多義的だから、すべて
の場合を見通して作られているような、なすべきことを一意的に示すようなマニュアル
ゆえにただそれに従っていればいいようなマニュアルはありえないのだった。必要なの
は新しい状況での自由な創造的行為である。第2に、宗教の観点からはもっと重大なこ
とだが、仮にマニュアルがあったとしても、それに従って行為する主体が「単なる自我
」だったら、行為は「人為」に転化して、マニュアルを良心的に守れば守るほど、創造
的な「生」から遠ざかってしまうのである。(ibid.)

では、このような困難な生を生きる「自由な創造的行為」の主体とは何者なのだろう。八
木誠一氏はこのように書いている。

(……) 人間の主体 — ここで「真実の主体」といっておこう — は理性的自我で
はないということだった。理性とは、「我思う、ゆえに我あり」の「我」が自我である
ことから明らかな通り、自我の言語能力であるが、特に考え、認識し、語り、行為を
選択する能力、さらに知り、考え、語り、行動しながら、その正しさを吟味し検証する
能力、こうして他人を説得する能力である。私は、人間というものは理性的にものごと
を認識し、目標を選び、それを意志的に実現するものだとして理解していた。すると、人間
の主体は理性的自我なのであった。しかし実はそうではなく、人間は生、それも身体と
しての生なのであった。人間は理性でも精神でもない。身体である。身体とは「肉体」
— 自我と対立する肉体 — のことではない。身体とはこころを含む全体であり、
自我は元来その自覚的・意識的な部分である。そして自覚とはこころを含む身体の働き
全体の自覚のことである。身体は世界の一部であり、生命世界の一環であり、人格的他
者と共存する人格である。自覚とはそれに気づくこと、さらにそれを肯定し、願い、欲
する自分に目覚めることである。(ibid.)

先ほど引いた私の例に当てはめると「嘘をつくべきでない」という定言命法（「一意的に示すようなマニュアル、ゆえにただそれに従っていればいいようなマニュアル」）に無条件にしたがって、何の葛藤もなく真実を言うのではなく、己れの全身体性をかけて判断し、行為し、その結果のすべてを自ら負うということである。その都度「新しい状況での自由な創造的為」にかけるしかないのである。

5 私自身のささやかな経験から

冒頭『ドイツ町から町へ』の中で出会った漫画のモチーフは、ずっと以前から私が感じ考えてきたもので、いわば旧知の間柄だった」と書いた。

思えば、その問いの浅さは否むべくもないが、大学に入ったころの私も世間を吹く風のまにまに漂う自分に嫌悪し、絶対の探求を試みたことがある。鈴木大拙氏や古今の禅者の著書を繙き、ほんの少しだが参禅したりした。しかし、機根乏しき私がそこで得たものといえば妙な言い方だが、しっかりと全身でおろおろするしかないのではないかという漠然とした感じだったように思う。そして、ヘッセの東洋的な無常観に共感したり、ロマン・ロランの長編小説から、人間における真の強さについて考えさせられたり、自分の弱さを素直に生きた山頭火に慰めを見いだしたりした。

やがて、禅宗が不立文字として切り捨てたことばの世界を素通りしては、人間を知ることにはできないのではないかという思いがつのようになり、丸山圭三郎氏を通してソシユールに出会い、多くの知見と刺激を得た。

また、私はそれまでの体験から、日常性がもたらす澁のような圧迫感や閉塞感に風穴を開けてくれるのは、いつも、狭義の理性に蝕まれていない身体性であることに気づいていた。そこで、肥大化した理性の重圧に押し拉がれていない同時代の人人の営みから学ぼうと、文化人類学や社会人類学などの本も読むようになった。さらに、人類の原風景を求めて京都大学を中心としたサル学やコンラート・ローレンツらの動物行動学の本にも親しむようになった。

その他、心理学、精神病理学、社会学、生物学、哲学等々、感銘を受けた一冊の本、一人の著者が導き手となり、次から次へと己れの内面に生じる欲求のままに、量的には微微たるものであるが乱読を極めてきた。

また、それらの著者の日常の息遣いが聞こえてくるようなエッセーを通して、人間的な魅力に触れることは何ものにも変えがたい喜びであった。イスラーム学の井筒俊彦氏の学問に寄せる情熱や業績、日々の生き方等を知るにつけ、輕輕に「碩学」などという言葉を使うべきではないということも学んだ。

このような私にとって、八木誠一氏の著書の中で出会った、「人生の諸場面はあまりにも複雑かつ多義的だから、すべての場合を見通して作られているような、なすべきことを一意的に示すようなマニュアル、ゆえにただそれに従っていればいいようなマニュアルはありえないのだった。必要なのは新しい状況での自由な創造的行為である」という文章は、果てしない困難を怯まずに生きろ、という厳しいものであるが、それはまた、それしかないのだと

勇気づけてくれるものでもあったのである。

[引用・参考文献]

池内 紀 『ドイツ町から町へ』 中公新書、2002年

八木誠一 『新約思想の構造』 岩波書店、2002年

石川文康 『カント入門』 ちくま新書、1995年

岸田 秀 『ものぐさ精神分析』 中公文庫、1982年

『続ものぐさ精神分析』 中公文庫、1982年